

六花



RIKWA

12

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

秋桜一転氷上時雨かな
見舞受く峠越えつつある紅葉
飛び出しぬ鹿の話をしてをれば
きのこ咲く水車支ふる棒にさへ
むこ殿へ丹波杜氏の新走
焼き栗に列なし吾は怖れなす
コスモスの氷上郡に果ててゐし
新蕎麦を挽く音に皿重ねけり
新蕎麦や猪口は色白出石焼
離々留々と冬こほろぎの逝きました
美酒をつぐ音とおんなじ冬ちちろ
冬鯉の紅色に目の澄みにけり
舐められし耳ひんやりと星月夜
里山の無傷の柚子をいただきぬ

万葉の夜長樂しも飛鳥の蘇
古法華榎落葉に実のまじり
風の空は真空切通し
紅葉して一枚岩の切通し
山茶花や半肉彫の仏顔
紅葉して桜大樹のねぢれあり
散り紅葉蟹の逃げ行くかとまがふ
初鴨の万里飛び来し声を吐く
がつくりと雨に大輪菊の花
散り方が白山茶花とヤス子いふ
冬雨の皇帝ダリアへこたるる
団栗の踏み割られたる白さかな
数珠玉をつなぎなほさば百七つ
注連を縋ふ手許足許散らかして

雪嶺抄

秋天へ

笹村 政子

滝音の白きしぶきを秋天へ
せせらぎのまぶしくなりし椿の実
雲行のあやしき午後の女郎花
空澄むや鯉のあぶくの直ぐに消え
お点前へくぐりし秋のすだれかな
太梁の下に待たされ走り蕎麦
晚酌の夫に分かちぬ月見豆
鈴虫や霧吹く夫の指なごみ
尼寺に尼気配なき断腸花
霧さぐり祖谷の外湯に浸りけり

積みれたる薪に掛けある烏瓜 藤生不二男

つまれたるまきにかけあるからうすり ふじおふじお

古民家の土間に日の差す丹波栗

かなかなのこゑの染まりし夕日かな

峰雲のくづれし秋の夕焼かな

積みれたる薪に掛けある烏瓜

秋風鈴仕舞はんとして鳴りにけり

晩秋の里山。陶芸家か農家の軒下に冬に、備えた薪が積んである。農作業の帰りか散策で採ってきたのか蔓のついた烏瓜。後で生けようと無造作に掛けてあるように見えるが、その掛け方が生け花や茶の精神に通じる、あるがままになのである。しかし、さりげなく掛けてあるか見え、ゆとりがあつて隙がない。よほどの通人を感じさせる掛け方、と息を呑む作者が見える。句の詠みぶりもさらりと「あるがまま」で読者にやさしい。積み上げた薪の薄暗い背景の色と烏瓜の紅との対比も鮮かである。

法師蟬鳴きやむも天揺れやまず 田尻 勝子

渡り行く名月風に吹かれつつ

法師蟬鳴きやむも天揺れやまず

理由として名月見よとメールかな

月光や日本列島危険満つ

海百合と三葉虫と聖樹なり

ほうしぜみなきやむもてんゆれやまず たじりかつこ

つくつく法師が天を揺るがすように激しく鳴いていた。その鳴き声が止んでも、声の残像のごとく天が揺れ止まないと、大胆に詠んだ。というより勝子には、そう感じたのであろう。一旦揺れだした人の脳や視力の慣性は、すぐに平常の状態にはもどりにくい。例えば下船してしばらく陸が揺れているように錯覚することは誰しも経験のあるところ。また、強い光を視ると、視線を外したり、目を瞑っても残像が残るようである。中には法師蟬のせいではなくても、常に天が揺れているように思う人も存在する。

雪卿集

源氏の間

升田ヤス子

瀬田川の風の素通り駒繫
石山や秋明菊の固つぼみ
萩の露ひとつづつに日を孕み
源氏の間秋の思ひのかむろの子
竜淵に潜みし岩をくぐりけり

秋うらら

永田万年青

秋夕焼背にしてお辞儀したる人
初めての町にゆきたし秋の暮
にはとりに寄れば横向く秋うらら
秋うらら小径に竹の煙草盆
秋の川小さき水車速かりき

雪卿集

花火大会

志方 章子

立秋といふ一言に元気づく
屋根越しに花火大会見てをりぬ
大人びし子の眩しかり夏休
夏休ボーイソプラノ騒騒し
朝顔の咲き尽したり夕間暮

瓢の笛

松本文一郎

八月や力と技の書道展
瓢の笛愚痴も恨みも思ひきり
草虱好き嫌ひなく付きてくる
水撒くやおんぶばつたの手の甲に
鯖を煮る夫婦和合の味噌加減

雪 卿 集

秋
雨

出
口

誠

彼岸花一つ離れて咲きにけり
秋の蝶堤に止まりながら飛ぶ
鳥たちがせわしなく飛ぶ秋の昼
秋雨の瓦濡らして過ぎゆけり
秋の川中洲の草をなぎ倒す



雪樹集

紫式部
廣畑育子

唐橋も百日紅も雨の中
勾欄の下に千年蟻地獄
匂袋嗅げば消えたる蝉の声
式部の実まだ紫にほど遠き
蝉の声ぱつと開ける岩くぐり

雪隠

赤松有馬守破天龍正義

御馳走に舟漕いでをり生身魂
バスを待つ母子団栗拾ひけり
雪隠に山芍薬の活けてあり
紫陽花の帰り花置く水車庵
子規忌かな寺の鐘の音聴いてをり

雪樹集

理 由 田 尻 勝 子

渡り行く名月風に吹かれつつ
法師蟬鳴きやみ天の揺れてをり
理由として名月見よとメールかな
月光や日本列島危険満つ
海百合と三葉虫と聖樹なり

栗 ご 飯 溝 渕 弘 志

せせらぎやラムネ沈めてをりにけり
大杉を目の前にして栗ご飯
鶏のこつく勢ひ秋の空
秋うらら緑の中に溶け込めり
大山や噴火の如く秋の雲

雪樹集

蓮の花

住田千代子

蓮咲いて畦より低き遠嶺かな
電源を一つ増やしぬ盆用意
雲ゆきを伺うてをり夕立あと
違雷の雨戸の中にひとりかな
水盤に浮かべてみたる散蓮華

秋風鈴

藤生不二男

古民家の土間に日の差す丹波栗
かなかなのこゑの染まりし夕日かな
峰雲のくづれし秋の夕焼かな
積まれたる薪に掛けある烏瓜
秋風鈴仕舞はんとして鳴りにけり

蛍雪譚

六甲選

二十八年十二月号鑑賞

以前にも言ったが、添削や句会指導はあくまでも技術的なこと。しかし、その先はその人の本来持っている才能をどう呼び出し、奥底から汲み出すか、自然から受け止めるか、頂くか、心がけ次第である。「私には才能がない」と、思うのは間違いである。もともと俳句に興味を持つ事自体が才能。あとはどれだけ楽しみながら句に関わってゆくかだ。楽しくなるためには少しだけ苦しんで欲しい。少し苦しむと薄い壁が現れる。しかし破れない壁はない。必ず破れる。壁を破るのは、一度下がつて、助走を付けて体当たりすること。主宰自身も今から振り返れば笑止なことだが、一年間一日七句を課して続けた。とにかく続けた。しかしそのことが心に障害をきたした。ヤワなくせに無理したからだ。無理は苦しみを生む。だが、河合隼雄の苦しい楽しさ、「苦る楽しい」という言葉に出会った。苦吟してやっと授かったときの楽しさがそれだろう。仏法でいう「有頂天」、達成感である。その達成感の積み重ねが次々と佳い連鎖反応を起こす。今、笹村政子はその佳い連鎖反応を起こしている。主宰がいくらダメ出ししても、これでもかこれでもかと食い下がってくる。それが主宰は楽しく、政子も少し楽しいに違いない。句集「初鼓」の序文にも書いた。政子は明石城公園へ出かけて、何も掴めずに写生だけして帰ってくる。その繰り返しの中に見いだしたものは大きい。

弟子の句の皆よく見ゆる秋灯下
六甲 錯視という現象か。ある所から見ると海が田圃や畑の

上又は下に存在するように見える。例えば坂道を下りながら前方の海を見ると海の方が土地よりも上に見えることがある。そういう現象を詠んだのかと思うが、こういう句を見ると、主宰はどうしてもその場所に行ってみたくなる。来年の話をしたら鬼に笑われるが、蓮が咲くのを待つて連れて行って貰いたいものである。

花野尽き火口へ下る道標

平居 滯子

花野は秋の草花が咲いている野原。綺麗だなあと思いつながら次々と現れる野花を歩いているうちに気が付けば火口へ降りる道しるべが立ちふさがった。これ以上進んだら危険ですよと書いてあるのだから、自己責任で火口へ下れますよ、というのか、活動していない休火山で、下りることが可能なのかも知れぬ。花野に見とれて、気が付けば、という感じが良く出ている。

「秋の夜は己の影を抱き眠る」は孤独な寂さを詠んだのであろう。

